

夏の終わりにアメリカ南部で発生した大型ハリケーン「カタリーナ」は、自然災害であつたけれど、その対応においては人災であつた。8月26日にルイジアナ州知事ブランコが、緊急事態宣言を出し、翌日にはミシシッピ州も緊急事態を宣言した。同時にブランコ知事は、ブッシュ大統領に連邦政府の救援を依頼するのだが、大統領はその間、友人の誕生日パーティで大型ケーキの前で談笑する写真が報道されはしても、災害対策を真剣に考えてはいなかった。連邦部隊が投入されるのは、その2日後である。

今日のCNNの一方的なグローバルバージョンには批判的にならざるを得ないが、それでも私たちが日常的に世界の各地の出来事を映像で知る手段として、このテレビ局の影響力は大きい。「カタリーナ」の報道を通して、私たちはアメリカ合衆国南部の現状を認識することができたのではないか。被災者の大多数が白人ではないという事実を、テレビは率直に映し出していた。

今年度の研究所の企画として実施した全12回の水曜文化講座は、前期の終わりには詩人吉増剛造氏の「言葉のパフォーマンス」があり、後期の最終回には、金時鐘氏の「詩のはなし・詩の朗読」があつて大盛会のうちに終了した。毎回、聴衆の方々から「とても感動した、勉強になった」という言葉を聞くと、大変に嬉しく研究所の存在の意義を感じることができた。

金時鐘氏は5篇の詩を朗読されたが、「帰る」という詩は半世紀ぶりの故郷訪問を、「残った何が私にあつて帰れる何があるのか」という言葉で魂のうめきを声にした。本号の特集と響きあい、「ホーム（故郷）」と私たちの関係性をふたたび考えてみる。